

29 . 地下の世界 (ミンダナオ)

大昔、年取った未亡人と彼女のハンサムな息子ジェグズがいました。彼らは貧しい家庭で、川の近くの小さな家で、質素な暮らしをしていました。しかし、彼らの生活の苦しみは、お互いをもっと深く愛するものにして行きました。

ジェグズは、一日のほとんどをそばの川で魚釣りに費やしましたが、彼の釣りに、釣竿は、木の枝でできて、糸は母の綿から、釣り針は曲がった釘でした。

ジェグズは、たくさんの魚を獲ったことはなくて、それらは、あまり大きくはありませんでした。しかし、毎日彼と母が食べるには、十分でした。

ある日、ジェグズは、いつものように川岸に座って、針と糸を深い水の中に入れました。糸の端に、魚の食いつきを感じたので、竿を引っ張り上げようと思いました。しかし、どうしても、いくら彼が骨を折っても、釣り糸はちっとも動きませんでした。それは、水の底の岩か、枝にひっかけたに違いありません。釣り糸は自由にならず、ジェグズは釣竿を降ろし、何が彼の糸をひっかけているのか、見つけることができると思って、服を脱いで、深い水の中に歩いて入りました。

水がジェグズの腰まできた時、彼の下の水の中をじっと見ました。水は少し濁っていて、しかし、ジェグズは下の深みに消えていた釣り糸をうまくつかまえました。それには何もついていませんでした。釣り糸を取りはずすため、彼は水の下にもぐり、それをはずすために手を使わなければなりませんでした。

ジェグズは深い深呼吸をして、川の下にもぐりました。彼は泳ぎがうまくて、何も心配はいりませんでした。彼は泳ぎに泳いで、川底に深く深く、釣り糸を追って行きました。彼は、川がこんなに深いとは思いませんでした。

しかし、おかしなことに、彼が深く泳げば泳ぐほど、水はきれいになってきて、そしてついに、彼は釣り糸が、彼から数メートル先の、小さな穴に消えているのを見ました。

フィリピンの神話と伝説 29 . 地下の世界

ジェグズは穴に着き、釣り糸に従って、内側に入りました。しかし、はっきり見えるようになった穴の内側に泳いで入ると、びっくりするようなことが起こりました。穴の内側には水がなかったのです。

ずぶ濡れのジェグズは立って、彼は自分が大きなトンネルの中にいることがわかりました。それは岩をくり抜いたものでした。このトンネルの壁は、燃えるたいまつで、明るくされていました。この長く、輝くトンネルの端に、ジェグズは、木の戸を見つけました。興味をそそられたジェグズは、トンネルに沿って、ドアの方へ、歩きました。

ジェグズがゆっくりとドアを開け、それを通り抜けて歩くと、彼はそこが明るい部屋であることを知りました。しかし、この部屋にあふれている光は、燃えるたいまつから来るのではなく、小さな窓を通して、太陽から来たものでした。ジェグズは偶然、水の下のもうひとつの世界に入っていたのです。

ジェグズは彼の前の光景に驚きましたが、彼の思考は、急いで近づく重い足音によって、中断しました。

ジェグズが隠れる場所を見つける前に、年取った婦人が部屋に大まかで入って来て、彼の前に立ちました。彼女は白くて長い髪を腰まで伸ばして、ふさふさの眉毛は、大きく膨らんだ鼻の上で、中央が交わっていました。その女性は長い、流れるような白いドレスを着ていましたが、髪のように、まるでそよ風の中で、はばたいていました。彼女の手には、とうもろこしの鉢を持っていました。彼女の、困難を乗り越えてきた顔は、恐ろしく、ジェグズは、彼女の容貌には、いささが驚きました。

彼女は冷たく暗い目で見て、そしていかめしく言いました。「お前は、私の鶏たちを盗んだ！」ジェグズは驚きました。「鶏？」彼は唾を飛ばして言いました。「私は鶏なんか盗んだことはない。魚を捕まえただけだ。」

そのいかめしい老女は、ジェグズを冷たい目で

上から下まで見て、彼の言うことは信じられない様子でした。そこで、彼女は自分の鶏を大声で呼びました。「鶏！鶏！」彼女はどぎつい声で呼びました。「鶏！鶏！」

ジェグズが振り返ると、何十匹もの色鮮やかな魚が、空中を泳ぎ、彼に触れて、老女の方へ行きました。これらは、彼が毎日、彼と母の食用に獲っているのと同じ種類の魚でした。しかし、彼がまばたきして、またそれを見ると、色鮮やかな魚は、色あざやかな鶏にかわり、老女に向かってはばたき、老女は鉢のとうもろこしを、それらに食べさせました。

ジェグズは、このおかしな世界から出てゆく時間だと、感じました。彼は振り向くと、ゆっくりつま先で歩いて、ドアの方へ向かいはじめました。しかし、彼が一步目を歩く前に、老女は腕で彼を荒っぽくつかみ、他の部屋に引っ張って行き始めました。彼女の年齢では考えられない不可解な力で、彼がいくら努力しても、ジェグズは、彼女の恐ろしい腕力から、自分を離すことができませんでした。

その老女は、ジェグズを部屋に引っ張って行き、そこは壁中、ピカピカ光る宝石がちりばめてありました。

「あなた！」と老女は夫を呼んで叫びました。「来て、鶏を盗んでいた泥棒を見つけた！」

宝石をちりばめた部屋のドアの外では、大きく獰猛な男、老女の夫が立っていました。彼も長く長い髪に長く長いあごひげを生やしていました。彼の大きな革のベルトには、大きな短剣を入れた金の鞘をつけていました。

その獰猛な男は、鞘から鋭い短剣を引き出し、震えるジェグズの方に、脅迫的に歩いて来ました。「それでは、お前は罪のために、その代価を払わなければならない。」その男は、そう叫ぶと、ジェグズの頭の上に短剣を振りかざし、突き刺す用意をしました。

「いや、待ってくれ。」ジェグズは叫びました。「私は潔白だ。私はあなたの鶏を盗んでいない。私は、誓うが、魚を盗んだだけだ。」

フィリピンの神話と伝説 29 . 地下の世界

老人は、追及をやめました。しかし、まだ短剣をジェグズの頭の上に威圧的に持っていました。「それらは、お前には、ただの魚に過ぎんかもしれんが」と老人は叫びました。「しかし、我々には鶏だ。」

「それでは、盗んだものを払おう。」とおびえたジェグズは言いました。「私を家に帰してくれ。そして、そうしたら、あなたの望むものを何でも払おう。」

「我々は、お前の返済などほしくない。」とその男は叫びました。「我々は鶏を返してほしい。もし、それを返せないなら、お前の命で払わなければならない。」

老人は短剣をジェグズの頭に振り下ろそうとしました。おびえたジェグズは、目を閉じ、一撃が来るのを待ちました。しかし、若い少女の声が叫んだ時、老人の死の一撃は中断しました。「ダメ！お父さん、止めて！」

老人はやめて、そして、短剣を下ろしました。

ジェグズは、彼の目をあけて、甘い声のする方に、目をやりました。彼は絶世の美人を見ました。若く美しい少女が、青い目をきらめかせて、長い黒髪をなびかせ、白いドレスが細い体にぴったりとくっついていました。

その若く美しい少女は、名前をマヤと言い、ジェグズと彼の父の方へ動きました。しかし、彼女は地上を歩くと言うより、すべるように見えました。あたかも何センチか浮き上がっているように。「彼を殺さないで！」彼女は父に嘆願しました。彼女の大きなオーシャンブルーの目を潤ませながら。「そのかわりに、彼をあなたの農場で働かせて！彼は死体になるより、あなたの良い働き者になるわ。」

若い少女は、明らかに父に影響力がありません。彼女が頼んだので、まもなく、魔法のように、ジェグズは、自分が大きな農場の真ん中の畑にいて、地下の太陽によって、温まっているのがわかりました。

ジェグズは、畑で苦役をさせられました。毎日、毎日、彼自身の世界に、いつかは帰れるだろうか、

とっていました。彼が困難な状況を我慢できるのは、美しいマヤが毎朝と午後、ジェグズに食べ物と飲み物を持って来てくれたからです。

それは明らかに若い少女がたいへん強い、やさしい感情をジェグズに持っていることを表わしていました。そして、ジェグズもその美しい少女と同じ感情を持ちましたが、彼は年取った母と交信不通になっていることが気になり、彼自身の世界にもう一度帰って、母に会いたいと切望していました。

彼は、マヤに彼の世界に帰る助けをしてほしいか、そして、彼と一緒に行ってほしい、と頼みました。

若い少女は、ジェグズに同情を感じ、彼が家に帰ることを助けることに同意しましたが、しかし彼については行けない、地下から水の上の世界に入ることは禁じられていることも告げました。

マヤは約束を守って、その夜、ジェグズを父の農場から離れた、畑の外に導いて、長い石の階段まで案内しました。それはたいへん高くそびえていて、一番上を見ることはできませんでした。

「この階段は、あなたをあなたの世界に導いてくれるでしょう。」その少女は笑ってジェグズに小さな袋を渡しました。

「私は君にまた会えるかなあ？」ジェグズは指でマヤの長い髪をなでました。

「あなたは、この階段を下りて、私に会いに帰って来られます。」とその少女は答えました。「しかし、この階段は、ただ満月と新月の時にしか現れません。しかし、それはまた、あなたが本当に、私の約束を守ってくれなければ、現れないのです。」

「私は、常にあなたに対して真実です。」ジェグズは答えました。「そして、私は、常にあなたへの約束を守ります。」ジェグズは笑って、暖かな口づけを少女の唇にしました。

「もうひとつ。」とマヤが言った時、若者は彼女の世界を出る準備をしていました。「私に約束してください。この袋をあげるのので、この世界を出るまで、それを開けないでください。」

フィリピンの神話と伝説 29 . 地下の世界

「約束します。」とジェグズは笑って、少女に別れを告げ、そしてゆっくりと長い階段を昇りはじめました。彼女がくれた小さな袋を持ちながら。

ついに、ジェグズは階段の一番上に着いて、そこには小さな隙間がありました。彼は、彼の世界の川岸にいることがわかって安心しました。しかし、彼が振り向いて隙間を見ると、それは消えていました。

ジェグズは小さな袋の留め金を閉めて、彼の家への道を行きました。

ジェグズの母は、また息子に会えたことで、大喜びでした。そして、嬉し涙で抱しめました。彼女がジェグズに、何が小さな袋にあるのか聞くと、彼はそれを開け、びっくりするようなものを見ました。それは、いっばいの高価なピカピカ光る宝石でした。彼と母は、びっくりしました。今や彼らは金持ちになったのです。

彼への言葉どおり、毎満月と新月、ジェグズは、川岸の秘密の隙間にもどり、長い階段を降りて、地下の世界に下り、愛するマヤの所へ行きました。

彼らは一緒に幸せでした。ただ、ジェグズは永遠と一緒に居たいと願いました。満月と新月の夜は、早くは来ないと感じていたからです。

そして、毎回、ジェグズは彼の地下の世界の恋人を訪問し、彼女はいつも、宝石の袋を帰る時に手渡しました。

ある日、ジェグズはいつもの別れをマヤに言うと、長い階段を昇って彼の世界へ帰る準備をしました。若い少女は宝石に入った袋を渡しました。しかし、このたびは、袋はより重く、いつもよりいっばい入っていました。

殻が長い階段を、彼の世界へ帰るために昇ると、ジェグズは彼の運んでいる大きな袋に興味が出てきました。ほんの数段昇った時、彼の好奇心が上回りました。そして、袋を開けて、中をのぞき見ました。しかし、彼が驚いたことには、袋の中には、ただ、役に立たない石が入れられているだけでした。

はしごの根元から、マヤは恋人が袋を開けたのを見ました。それは、明らかに、彼女の意志に逆

らうものでした。彼女は死にもの狂いになって、若い男に叫びました。「ジェグズ」彼女は叫びました。「あなたは、私との約束を破った。今からは、もう私を二度と見ることはできません。」涙の中で、泣きじゃくるマヤは、階段の下から走って、彼女の世界へ消えました。

「帰って来い！」心を乱したジェグズは叫んで、階段を降りようと、やってみました。「赦してくれ、マヤ。私が本当に悪かった。」

しかし、それは遅すぎました。石の階段は揺れて、ジェグズの足元から崩壊しました。彼はすぐに振り返り、急いで階段を駆け上がりました。階段が彼の近くでボロボロと細かいガレキになって行きますから。

間に合って、ジェグズは揺れる階段の上に着き、上の小さな隙間から通り抜けました。彼が穴を飛び越えると、石の階段は、粉々になって、地下世界へ落ちて行きました。そして、隙間は彼の後ろで閉じました。取り乱したジェグズが、彼の家へ帰ると、彼は母が台所のテーブルで泣いているのを見つけました。

「お母さん」ジェグズが言って、泣いている母を慰めて「どうして泣いているの？何が悪かったの？」

彼の母は、すべての宝石の袋を開けました。それは、下の世界からジェグズが持ってきたものでした。彼らは土地と新しい家を買うために、ためていたのです。

「私たちは破滅だ！」と母は泣きました。

ジェグズが宝石を調べて、彼は恐怖を感じました。彼らの持っていたものは、価値のない石ばかりだったのです。彼は、母のとなりでテーブルに着いて、両手に顔をうずめました。

すべての満月と新月に、その運命の日から、ジェグズは川岸の地価の世界に通じる隙間を探しました。そこには、彼の愛するマヤがいるのです。

しかし、隙間は二度と現れず、悲しいジェグズは、地下世界の、深い青い目をして、長い黒髪の、美しい少女を見ることはありませんでした。

いつまでも、ジェグズは、自分自身をのろいま
フィリピンの神話と伝説 29 . 地下の世界

した。彼が、若く美しい少女と約束したことを破ったことについて。